法華経

真っ当に生きた

第８７号H25年秋号
伊豆市　法住寺 発行

今年もご縁のある方々のお葬儀を勤めさせて頂いた。人の生き方、足跡はそれぞれ違うので、故人を讃嘆しご本尊さま、お祖師さまに成仏を請い奉る引導文は、お一人おひとりお創りすることになる。その折、故人にさまざまなことを語りかけたりお聴きしたりするのだが学ぶことが多い。

＊

Ｓさんは大正のお生まれで、この時代の方々は二十代が大戦と重なり、大なり小なり多くのご苦労を乗り越えてきた。Ｓさんは上海で活躍していたご主人のもとに嫁ぎ大陸で新婚生活が始まった。戦雲あやしくなり、幼子を背負い何日も何日もかけて、やっと日本に辿り着いた。その道すがら、もうご主人とは会えないと覚悟したこともあったという。

そうしたご苦労があり、何と云っても食べるものがなく、生きることは食べることであり、食べることが生きることであった。食べるものが欲しいと、どんなに思ったことか。そんな想いをＳさんに語ると意外にも「そうじゃないのよ」と云うのである。

「あの時代は確かに食べるものがなく、どれほど苦労したことか。食べるものがありさえすればと、どれほど思ったことか。確かにその通りなんだけど、そんな中で真っ直ぐに、真っ当に生きてきた。そういう覚悟があったと思う」と。

私はこの時代の方々を想う時、食べものがない辛さ、苦労をずっと想っていた。そして今の時代、食べものは溢れ、贅沢を云わなければ食べることに苦労することはない。あの時代の方々が、あれ程食べものが欲しいと夢にまで見たこと以上の現実である。しかし何か人々はスッキリしていないのである。何なのだろう。何故なのだろう。ずっと想っていたことが、Ｓさんが語ってくれたことで解ったように思う。

それは生き方の問題であった。真っ直ぐに、真っ当に生きる、その覚悟が今の人々にはないのだと思った。

＊

法華経寿量品に「常懐悲感　心遂醒悟。常に悲感を懐いて　心遂に醒悟す」と教示している。『生きていれば悲しいことや苦しいこと、辛いことや嫌なことはある。むしろあって当たり前。でも大自然の摂理に沿って真っ当に生きて、悲しいとか苦しいなら、むしろ懐きなさい。心深く温めなさい。そうすれば必ず何時の日か、心は青空の如くスッキリと晴れ、人としても深まりが増します。その日が必ずきますよ。』

＊

悲しみや苦しみは生きるかぎり、どんな時代になってもあるにしても、モノに恵まれた今の時代で、どのような生き方をしたらよいのだろう。

私たちは幸いにも、その道をご先祖さまや善きご縁によって受け継いでいる。日蓮大聖人は私たちに「南無妙法蓮華経」と真実の道を示してくださっている。迷うことなく、私にはお題目があると云えるのは、本当にありがたく幸せであり、やすらぐことである。

＊

弔辞でお孫さんが「何時もお婆さんが、南無妙法蓮華経をお唱えしなさいと教えてくれた。これからも心の支えとしていきます」と心を込めて語りかけていた。何よりの財産を残されたと思った。

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

山村御流。花は野にあるよう自然のままに活けるのが、この流派のこころです。その教えの中にある「花の見方」から。

『花をいける時、まず花瓶にさして見る。その時、何を見るか。

全体の姿、振りのよさ、長さ、大きさ、強さ、風情、足元の安定感、葉の美しさ、花の美しさ、実が、つぼみが、葉の色が、延びる力、枯れたものの面白さ、重なり具合、一本のすがすがしさ等々。

右のうち、いろいろな要素の中から、只一つ、他の事を全部すてても尚余りある、只それだけでもよいという感じ、その只一つのよさを見つけること。普通よくないと思うものの中からでも、よく見ればみつかるものである。その只一つのよさが、活け上がった花のよさになり人を引きつける力ともなる』とある。そしてその花の姿には潔い強さと優しさがあふれている。

＊

人として相まって、信心を強く持ってなお慈しむ心を深めてゆきたいと思う。また目にみえる表面の姿だけでなく、内面の美しさ迄わかるようになれれば幸せだと思います。

お会式

今年のお会式も、多くの方々から「本当に良かったです。ありがとうございました」、そして万灯行列参加の方から「楽しかった、嬉しかった」と声が届きました。

今年から、お勝手の女衆さんの手伝いを午後からお願いすることにしました。去年までは朝からの一日だったので、調理時間は短くなったのですが、皆さんがんばって下さり、手作りの美味しい料理がならびました。手作りコンニャクには味が染み込み、ネギぬた、キンピラ、煮しめ等々、大変なご馳走でした。

これらの材料は地元のもので、ネギ、里芋、新米、手作りコンニャク、そしてお酒、ビール等々皆さんが奉納して下さいました。こうしたご奉納と皆さんからの報恩会費でお会式ができています。大地の恵みの象徴としてのお酒を愉快に楽

田舎道をのんびりゆっくり

お寺の坂まで到着

元気に子供たちも

さぁ　皆さんも一緒に

大人も若者も子供も一緒に

子供たちの清浄な献灯

しく酌み交わす。お祖師さまをお偲びし、日々あることに感謝して乾杯。

勿論、飲酒運転はいけません。飲酒運転そのものが犯罪です。

今年は子供たちも大活躍です。万灯の纏を元気に振る姿は、邪気を払い健やかに成長する姿そのものです。

ドンドン、カンカン、ピーヒャララ～。

ドドンのドン、テンツクカン、ピーピーピー。

太鼓、鉦、笛が、ふる里、白岩の地に鳴り響く。ギャラリーが居ても居なくても、万灯の「白岩ばやし」が鳴り響く。お互いに慈しみあい、生きる幸せ、愉快、ゆかい。

お会式法要の献灯は毎年心が洗われます。ジ～ンと涙します、何と清浄な灯りでしょう。この子供たちが健やかに美しく成長して欲しいと祈りました。きっとお祖師さまは祈りを叶えて下さいます。

こうして毎年、毎年、江戸の時代から何百年とお会式が続いていることは、素晴らしいことです。私たちは、この良き伝統を受け継ぎ更に創ってまいりましょう。皆さん、ありがとうございました。

家族で参加も多く　池上会式

池上でも子供たちが活躍

トピックス

○寺子屋

寺子屋　夕食づくり

気持ちを集中　お経練習

今年も八月七、八日、寺子屋が行われ十九人の少年少女が良い体験をしました。

○白龍会　池上万灯

今年の十月十二日は土曜日、子供たちも大勢参加、大型バス満席四十五人で出発。気持ちの良い万灯を奉納することが出来ました。

○伊豆連合大題目

九月二十九日、今年の伊豆連合大題目が当山で行われました。百人余の方々がお題目を上げて下さいました。

その後、伊豆市高台寺住職、星野是高上人の法話「魂に響くお題目」があり、一心にお唱えして魂に響いた体験を、笑いを交えてお話し下さいました。

○本堂建立記録誌、発行

今年の六月で「本堂建立特別会計」を無事に閉じることができました。平成八年の「法住寺開山五百年・慶讃事業検討委員会」発足以来、実に十八年間の長きに渡る大事業でした。この事業に直接かかわって下さった檀信徒の皆さんのご苦労ご精進の一端を記録に残し伝えたいと記録誌を発行しました。

御志納金［八月～十月］

修善寺　室野　弘毅殿　祖母葬儀砌
元村　伊東はつ江殿　夫君七回忌砌
元村　山下　要　殿　尊母三回忌砌
修善寺　飯田　光高殿　寿量の塔納骨砌
伊豆長岡　清田家殿　葬儀砌

［地区懇談会等で志納金額は出さない方がよいとの声がありましたので、そのようにしてみました。皆さまのご意見を聞きながら変えていきたいと思います。］

お会式写真集をホームページに掲載、ご覧下さい

洋明さんのおはなし

実りの秋、収穫の秋。五穀豊穣に感謝する季節となりました。一方で、人間の力が及ぶことのない自然現象を目の当たりにすると、決して当たり前のことは無いのだと改めて感じます。万が一には、一がある。

最近、あるドラマの主人公の「やられたらやり返す。倍返しだ」「十倍返しだ」というセリフが世を賑わせている。見ていて確かに、自分を追いつめた悪に、倍返し、十倍返しの仕返しというのは痛快である。一言でいうなら「ざまーみろ」。悪い種をまいて、悪い実がなった時、それを刈り取るのは、その種まいた本人である。まさに因縁です。

さて、もしお釈迦さまがこの主人公だったら、「やられたらやり返す。倍返しだ」「十倍返しだ」と言っただろうか。きっとこうおっしゃるでしょう、一言「許す」と。

お釈迦さまは、自分の命を奪おうとした提婆達多（お釈迦さまのいとこ）を、「提婆達多がいたから悟りが開けた。修行の邪魔をし、命さえ奪おうとした提婆達多でもこの法華経では仏になれる」と説かれました。まさに大慈悲、これこそ仏さまの愛です。

あるお上人が「法華経の大慈悲とは愛である。愛とは好きという恋愛感情ではなく、その人の良いところ悪いところをすべて受け入れ、柔軟に許すこと。愛とはまさに許すこと」と教えてくれました。

何かを「許す」とはとても難しいことです。プライドや感情を捨て、自分を抑える時もあるでしょう。理不尽と感じ、辛く苦しく思うこともあるでしょう。そう感じる自分をも許せるのが仏さまの愛なのです。顧みると「倍返し」のドラマを見て痛快と感じる私にも、「許す」ことが出来たら、受け入れることが出来たらどんなに良いかという経験は沢山あります。皆さんはどうですか。身近のところでは家族、また知人や職場などの人間関係。本当に「許す」ことは、難しく、そして尊いことです。

「南無妙法蓮華経」には法華経のすべてが詰まっています。仏さまの愛「許す・受け入れる」心が詰まっています。もし今日、許せないことがありましたら「南無妙法蓮華経」と唱えてください。全部とは言いません。柔軟な心で一つでも許してみてはいかがでしょうか。一つ許せると、きっとその分、良いことが一つ増えるでしょう。